

受性試験は NCCLS の常法に従って行った。病原性遺伝子型は PCR 法で解析した。

H. pylori 陽性率は 77% であった。薬剤感受性はメトロニダゾール耐性が 72% であった。原因は不明であるが、原虫治療、大腸疾患などでの使用による耐性化やメトロニダゾール耐性菌の流行が考えられる。クラリスロマイシン耐性は 4.3% で低頻度であったアモキシシリン、テトラサイクリン耐性は検出されなかった。病原性遺伝子型は様々なタイプがみられた。

9 マクロライド系抗菌薬の免疫抑制(ステロイド様)作用の検討

宇野 勝次・齊藤 幹夫・阿部 学

水原郷病院薬剤科

マクロライド系抗菌薬 (MLs) は、抗菌薬の中ではアレルギー性が底く、びまん性汎細気管支炎 (DPB) に有効である。そこで、PHA 刺激による単核球産生の炎症性サイトカイン・ケモカインを白血球遊走試験のチャンバー法 (LMT-camber) で測定し、MLs の免疫抑制作用の検討を試みた。その結果、PHA による遊走活性に対して EM と CAM は $1\mu\text{g}/\text{mL}$ 、AZM は $6\mu\text{g}/\text{mL}$ 、RXM は $24\mu\text{g}/\text{mL}$ 以上の濃度で有意に抑制した。一方、 β -ラクタム系抗菌薬の CEZ, CTM, CAZ は $400\mu\text{g}/\text{mL}$ の濃度でも抑制を示さなかった。また、サイトカインの TNF は $100\text{pg}/\text{ml}$ 以上、IL-1 は $10\text{ng}/\text{ml}$ 以上、INF γ と IL-8 は $100\text{ng}/\text{ml}$ 以上で有意に遊走促進を示した。したがって、14 員環 MLs の EM, CAM, RXM だけでなく、15 員環 MLs の AZM も単核球の炎症性サイトカイン・ケモカイン産生抑制作用を有し、この作用が MLs の DPB 改善作用とアレルギー性の低下に関与していると考えられる。

10 2004年に上越総合病院小児科で分離された肺炎球菌・インフルエンザ菌の薬剤感受性の検討 — 2年前との比較および抗菌薬の前投与について—

大石 智洋・砂川 慶介

北里大学医学部感染症学

2004年1～3月に上越総合病院を受診した小児呼吸器感染罹患児より分離された肺炎球菌・インフルエンザ菌につき、薬剤感受性および抗菌薬前投与の有無を調べ、2年前(2002年9月～2003年3月)に行った同様の調査と比較した。肺炎球菌における PISP と PRSP を併せた割合は 55%、インフルエンザ菌における BLNAR の割合も 55% であったが、肺炎球菌は 2 年前と同等であったのに対し、インフルエンザ菌は 2 倍以上に急増していた。経口抗菌薬において、肺炎球菌インフルエンザ菌ともに効果の期待できる薬剤は、MIC および血中濃度を考慮すると、CDTR・CFTM であった。インフルエンザ菌検出例では、2 年前および 2004 年ともに抗菌薬の前投与があった群において耐性度が高く、BLNAR の増加と抗菌薬との関連が示唆された。

II. 特別講演

「腸管感染症の最近の話題」

横浜市立市民病院感染症部部長

相 楽 裕 子